

萱

2020・6

風萱集

亀田虎童子

考への及ばぬ処田螺鳴く
難聴の耳の耳鳴り四月馬鹿
老骨と思ひ思はれ酸葉囃む
あかんべも覚えし曾孫花は葉に
入院す桜吹雪を通り抜け

出牛 進

席取りの早退ありし桜かな
著莪の花俄かに墓参にぎはひぬ
高きかな脚立の揺るる剪定は
アマビエのコロナ退治よ春の夢
ぼたん雪不要不急はそれとして

松下 道臣

照れかくす鼻をこすりし去年今年
初日の出たてよこななめ顔に皺
閉ぢられし登山道路の淑気かな
冬の鳶螺旋階段あるごとし
別室の鬼となかよし節分会

小島 良子

ゆく春や百葉箱の白ペンキ
鳥引くや壁の映れる壁鏡
眼前の桜彼の日の桜かな
春服にポケットの無し昼日中
花曇り尖塔は何時折れますか



萱集

進選

残雪やつたなき文のひとつくんだり
東京 根來 隆元

くゆりみちいざ濡れ色の蓬餅
夕映えの野蒜抱くや千切れ雲
夕ごちやひつそり閑と屋形船
花街もしずもるそやの春の雨

どの雛も遠き世を見てゐたりけり
千葉 光成 敏子

年々に減つて五体の雛納め
初蝶やスコップ立て、ある畑
ぬかるみに轍の続く春浅し
ひと鳴きの雉に静もる沼の畑

飛花落花われに足らぬは我慢の緒
埼玉 鈴木 愛子

世の騒ぎ知らぬがびちよう葱坊主
抛られし大根淡あは花咲かせ
初音かな野藪に影の見えかくれ
ビニールの袋ぷかんと花筏

埼玉 新沢 伸夫

話せども鳥は応へず春うれひ
トロツトの足並みは未だ春の駒
一畝は葱の擬宝珠の列となる
亀鳴くや六年生で髪を切る
洗濯のよく乾く日や土筆摘む

東京 野村 宏

と見かう見桜花あまねし吉野山
満目に優しさ舞へり名残雪
飛び立てる鴉の羽音草青む
いつときは老いを忘れる花盛り
薄ら闇行きつ戻りつ花筏

東京 ふなかわのりひと

懐かしさ儂さはらり桜かな
気配消ゆやがて響動めく花吹雪
意のままに纏まりうねる花の屑
迫り上がる型は不知火山桜
遠目佳しは樹の下夕桜

東京 武田 未有

春寒し耐へし客船離岸せり
天籟や房より垂るるぼたん雪
せめてもと見舞ひの文に花の種
転び寝へ来る初蝶の風来坊
桜鯛来たり鯛飯潮汁